

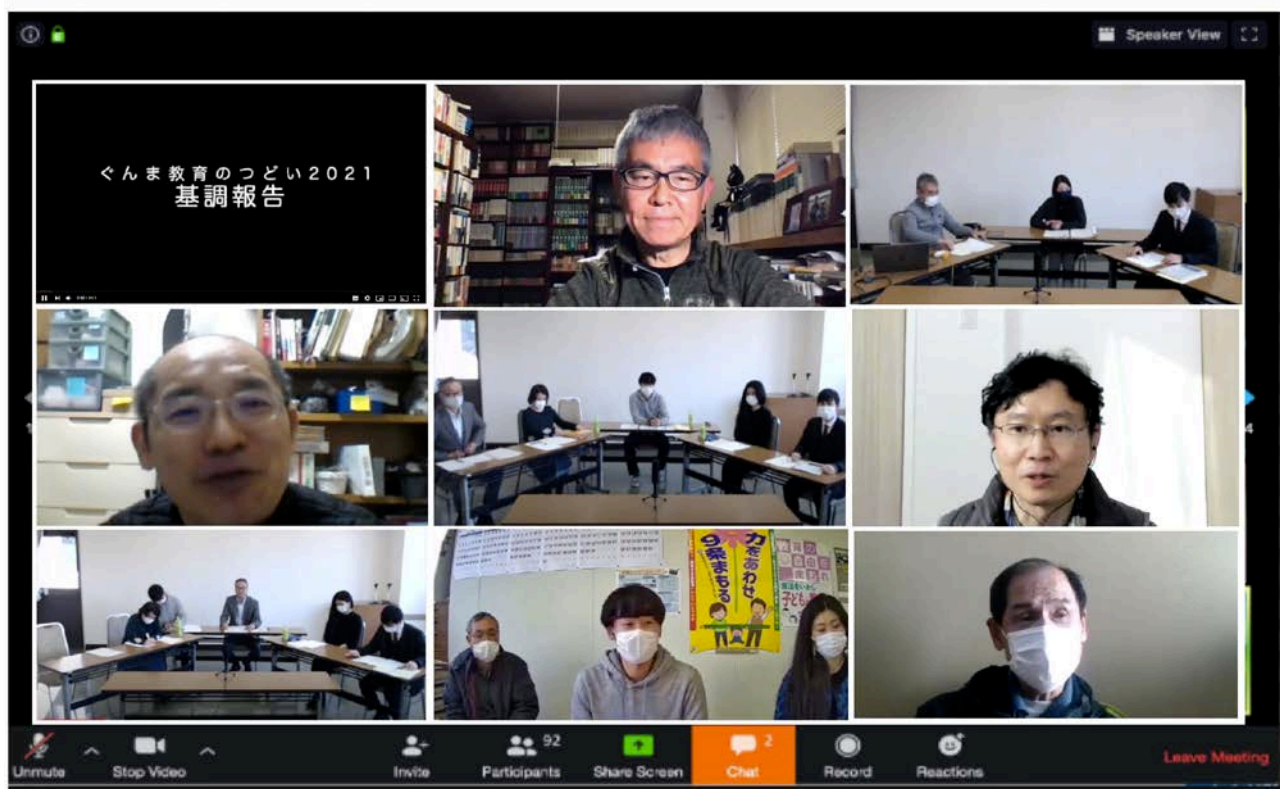
とびっく

「ぐんま教育のつどい2021」

オンラインで開催される

テーマ 教育の未来について語り合おう！

～コロナ禍を経験して思うこと～



当日の様子を Zoom 画面風に再現しました

2月11日（休・木）に行われた「ぐんま教育のつどい2021」は、コロナ禍における初の試みとしてオンラインでの開催となりました。主催者の群馬高教組教文部長の澁谷正晴さんは、つどい開催の取り組み文書の中で「新型コロナのパンデミックは、私たちの文明に深刻な『問い直し』を要求しています」と語りはじめ、現今の状況下で「コペルニクスの転回」にも匹敵する大変革が迫りつつあることを示唆しています。

昨年来、今まで当たり前だった事柄がその根底から覆される経験を私たちは幾度となく味わってきましたが、皆が集って教育について語り合うこの貴重な機会も、その例に漏れることはありませんでした。そんな中止不可避と思われた状況から今回のオンライン開催に至るには、すべてが白紙からの出発であり、主催者の皆さんの苦労は並大抵でなかったことが想像できます。

ところで、一口にオンラインとは言っても実際に経験していないとイメージしにくいものです。「オンライン授業」や「オンラインショッピング」・「オンラインゲーム」、そして最近では「オンライン飲み会」なるものまでありますが、要はインターネットなどの通信システムを介して個々の情報のやりとりをすることです。今回のつどいは、Zoom(*1)というオンライン会議ツールを使って、教育会館中会議室にいるシンポジストとそれぞれ別の場所にいる一般参加者がパソコ

ンやスマホの画面を通じてコミュニケーションをとりました。

目の前にいる相手との会話とは異なり、マイク・スピーカーと画面越しに行う言葉のやりとりはわずかなタイムラグも加わって、はじめはぎこちないものでした。しかし、程なくそれにも慣れてくると、参加者による発言は次第に熱を帯び、今までの風景がよみがえってきました。

さて、今回のつどいは「教育の未来について語り合おう！～コロナ禍を経験して思うこと～」をテーマに、20代～50代の教職員によるシンポジウムと、一般参加者も加わったオンラインワークショップで構成されています。正味三時間とはいえ中身の詰まった有意義な内容を、開催に至るまでの経緯を含めて先述の澁谷正晴さんに紹介していただきました。そして、当日シンポジウムのコーディネーターを務めた群馬高教組青年部長の千明俊太さんに当日の感想を語っていただきました。

前半に行われたシンポジウムの様子→



ぐんま教育のつどい2021



顛末記

群馬高教組教文部長
澁谷 正晴

私たちに突きつけられたもの

新型コロナウイルスのパンデミックは契機の一つであり、それ以前から経済格差の拡大や気候危機、環境破壊、AIの跳梁跋扈の兆し等々その他諸々、多くの問題が山積していた。現在私たちには、自らが築いてきた文明や社会への真摯な問い直しが突きつけられている。

しかし、何をどう問い直し、どのような方向に進めばよいのか。

例えば、40代の國分功一郎はイギリスの初期社会主義思想に目をむけ(*2)、30代の斎藤幸平はマルクス晩年の「資本論」草稿や研究ノートに着目し(*3)、それらを再評価している。この「若者」たちの主張は50代の私には「とても新鮮」というより、むしろ「驚愕」とも言えるほどのものである。自分とは「違う世界認識」を持った人々がここにいる。ただし「違う」とは、自分が今まで思いもよらなかったものに目を向けたという意味ではなく、自分がもはや諦め、目を背けてしまったものに確かな可能性を見出しているという意味で。

この時期だからこそ交流を！

群馬高教組は一昔前とは姿を変えた。現在青年部に属する組合員は3割を越えるほど。しかし残念ながら青年の活躍の場は少なく、壮年層との交流も少ない。この若者たちはどんな世界認識を持つのか。そこで思いついたのが世代別の代表者によるシンポジウムである。これなら若者の活躍の場が生まれ、世代間の交流も図れる。

しかしCOVID-19の再々拡大により、企画段階の「午前メインのシンポジウムを据え、午後は実践報告をもとにした交流を行う」という構想が、最終的に「シンポジウムとそれに基づく分散交流のみを午後に行う」という形になった。それでも千明さんの「まさにこの時期だからこそ交流がしたい」との希望をかなえることに意味はあると考えた。一方、人が集まることの危険からオンライン開催の必要性が高まり「オンライン集会の可能性を探る」という一面も生じた。

学校という場の可能性を再確認

シンポジウムでは、近藤さんから「選択の多様性と知のアップデートの必要性(*4)」が、悴田さんから「突然の一斉休校を迎えた教師と生徒の思い」が、村上さんから「コロナ禍に立ち向かう生徒会活動や授業の様子」が、多賀谷さ

んから「本当に大切なものは何かという価値の見直しの必要性」が語られた。全体を通して、学校という場の必要性とそれを求める生徒たちの姿や可能性を再確認することができた。また「世代は違っても向いている方向は同じ」ということも確認できた。

当日の参加者は25名と多くはなかったが、若い組合員の初参加もあり、分散会は余裕を持って意義ある交流ができた。

若年層の参加拡大は不十分であったが「教育の未来について考え、実践してゆくことは、私たちの生きている意味。豊かな時間に感謝。これから教育を志す若い世代も巻き込んで、またこういう会を開けたら最高」という千明さんの力強い言葉で「つどい」を締め括ることができた。

子どもたちとの併走に 未来への可能性が



伊勢崎清明高校 千明俊太
(群馬高教組青年部長)

目に見えない「公」が 自粛の空気を生む

未曾有のコロナ禍から1年、即ち世界中の人々にとって対処方法が「わからない」事態が発生して1年が経過した。今回の「教育のつどい」でシンポジストの前橋清陵高校の近藤先生は、これからの教育は「わからない・できない」事態に可能性を感じられる感性を育てていくことが重要だと語った。さて、コロナ禍で私たちの身の回りには、「わからない・できない」事態に可能性を感じられる瞬間はどのくらいあっただろう。

私は休校を伴った外出自粛期間中、子どもの保育園も長期休園になった為に特別休暇を取得して公園に散歩に出た。その際、公園の遊具やベンチが全て使用禁止になっているのを見て驚いた。犬の散歩の休憩をするお爺さんもいなければ、もちろん子どもや若者の声など聞こえてこない。あの場所には何の可能性もなく、「公」

とは何かを考えさせられた。公園は誰のものでもないが、みんなのものだと思っていた、その前提が崩された。公園は、自治体が権限を行使すれば利用を禁止できる施設だったのだ。その後、「公」が様々な私的領域に侵入して多くの可能性を奪っていく瞬間を目の当たりにした。

「公」の指し示すものが、「みんなの、公衆の」という意味から「お上の命令によって突き動かされるもの」に変わっていく様を見せつけられていった。もちろん、感染症蔓延のための対策として仕方ない側面もあると思う。だが、必要以上に自粛の空気を恐れたお上の命令が、人々の行動や実践を制限していく。

学校でもこの雰囲気はあった。「予測不能な何かが起こること」、「答えがわからないこと」を楽しめるのが学校であるのに、何も起こらないことが是であり、粛々とコロナ流行の退潮を待つだけの場所が変わっていった。ただでさえ生徒の自主性を重んじることに慎重な学校組織が、さらに大きな力を持って教員・生徒の行動を制限した。

様々な工夫で流れに抗う人々

しかし、この流れに多くの人が抗っていることを今回の「教育のつどい」で認識することができた。渋川女子高校では、新入生への歓迎会ができない中で在校生から1人1枚のメッセージを書き、それを貼っておくことでお祝いの言葉とした。「渋女体操」を個人特定されない工夫をしたうえで YouTube(*5)で発信し、実際にやってみせる機会を補った(渋川女子・村上高根先生)。高崎工業高校の倅田先生は、ツイキャス(*6)を使い生徒とコミュニケーションを取り、対面でのHRや授業ができない状況を払拭した。伊勢崎清明高校では、多賀谷先生や筆者が属する生徒会を中心に、ソーシャルディスタンスを逆手に取った体育的な行事を作り上げた(*7)。

この1年間で、対処方法がわからない為に



多くのことができない事態に陥った。しかし、それ以上に多くの人々が新しいアイデアをもって対処しようとする瞬間を見ることができた。夏先まで絶望に支配されていた学校の空気も、後半の半年でずいぶん変わった。これは、私の感覚的なものかとも思っていたが、どうやら違うらしい。どこの学校の生徒も、教員も、必死になってこの事態に対処して可能性を見出そうとしていたようだ。それを、今回の「教育のつどい」の随所から感じた。

若者たちの乗り越え方

人は、対処方法がわからない事態が起こった時、何とかして乗り越えようとしてしまうものなのだろう。私よりも、経験も知識も少ないはずの生徒たちが実践している様子を見て、この思いは確信に変わった。むしろ、純粹に生きている生徒たちの方が、うまく乗り越えてしまうのではないだろうか。この1年、様々なしがらみを抱えた国家レベルでの政策は迷走(*8)した部分が大きかったが、学校、特に生徒たちは固定観念を排除してうまく対処し、新しいスタンダードを立ち上げつつある。だからこそ、私たちはもっともっと子どもたちの言うことに耳を傾けて併走していくべきなのだ。教育の未来、日本社会の未来に「可能性」はまだある。

《注釈》

- * 1 : (ずーむ) 米IT企業Zoomビデオコミュニケーションズが提供するサービス。アプリをインストールしたユーザー間での無料Web会議が可能。
- * 2 : 「僕らの社会主義」 國分功一郎・山崎亮共著 ちくま新書 (2017)
- * 3 : 「人新世の『資本論』」 斎藤幸平著 集英社新書 (2020) (本誌P.19の「資料文献コーナー」に詳述)
- * 4 : 本誌P.8~9の「『ぐんま教育のつどい2021』補遺」を参照。
- * 5 : (ゆーちゅーぶ) 米IT企業Google傘下にあるオンライン動画共有サイト。サイト上に投稿された動画視聴の他、動画や

コメントの投稿が可能。当該の「渋谷体操」は対象・期間限定で公開した。

- * 6 : TwitCastingの略称。日IT企業モイによるオンラインライブ(動画・音声)配信サービス。スマホ・PCでの生放送が可能。
- * 7 : 「育ちと学び」No.46 「『新時代祭』の創造—伊勢崎清明高校生徒会総局の取り組み」参照。記事写真は、新時代祭における「ディスタンスリレー」の一コマ。
- * 8 : 最近の文科省案件だけでも、大学入学共通テストの英語民間検定利用、国語記述式解答方式やジャパニーポートフォリオ活用(いずれも頓挫・実施断念)など枚挙に暇がない。
- * 澁谷さん・千明さんの群馬高教組での職名は、2020年度のものである。

《資料:当日レジュメ抄》

(いずれもほんの一部です。詳しくはご本人へ)

悴田智子さん(高崎工業高校)

- ・休校しなければならぬほどの緊急事態なのか
- ・輪番出勤をほぼ丸無視
- ・クラス専用のグループラインとオンライン授業
- ・人間と、人間の構築したシステムの弱さについて
- ・自分ができないことは、生徒にも要求できない

村上高根さん(渋川女子高校)

- ・生徒全体を巻き込んで行動に移した生徒会の活動
- ・これからの世の中、勉強に向かうモチベーションって何だろう?
- ・自学自習できる生徒は一部。やはり対面が一番。今もペアワークをやらせて(しまって)います
- ・今まで大学入試で引っ張ってきた勉強のモチベーションが今後どうなるのか、とても気になる

多賀谷弘孝さん(伊勢崎清明高校)

- ・職場の「パワーバランス=発言力」の微妙な変化
- ・これまでの経験が活かしにくい時代(従来の力関係の変化により大切なものが見えつつある時)
- ・GIGAスクール構想では、「ツール」を使って何を「学ぶ」のか?
- ・生徒の多様性を認め、それに応じた教育の必要性
- ・押し寄せるDXの波と社会的弱者の包摂
- ・組合の存在意義・「ことば」の重み